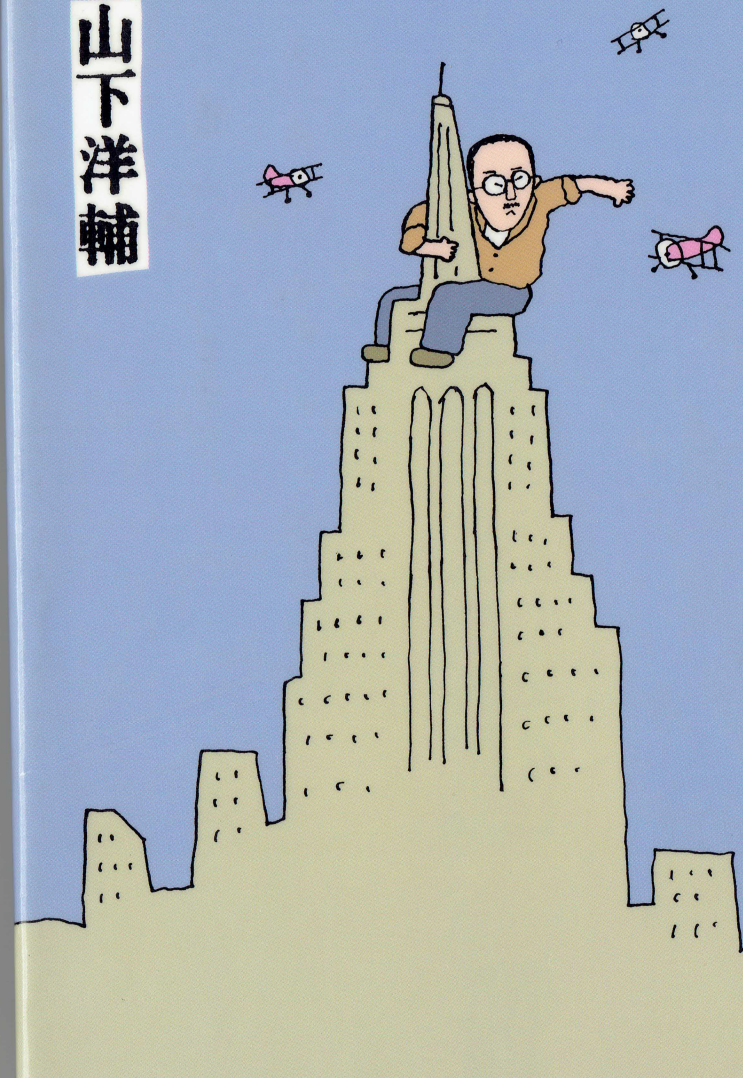
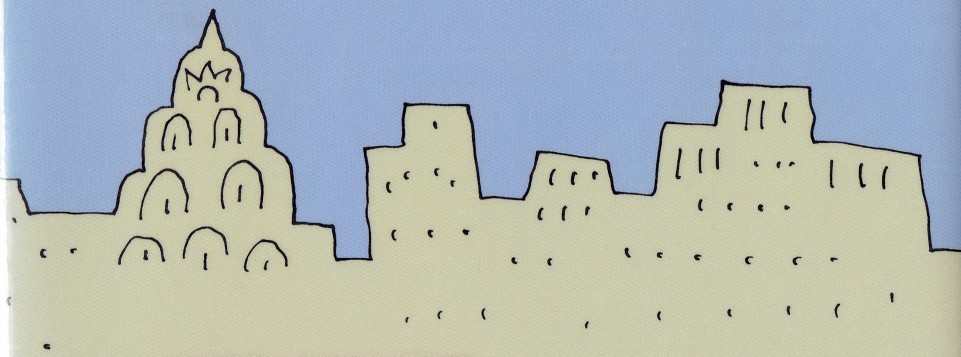
風雲摩天楼秘帖

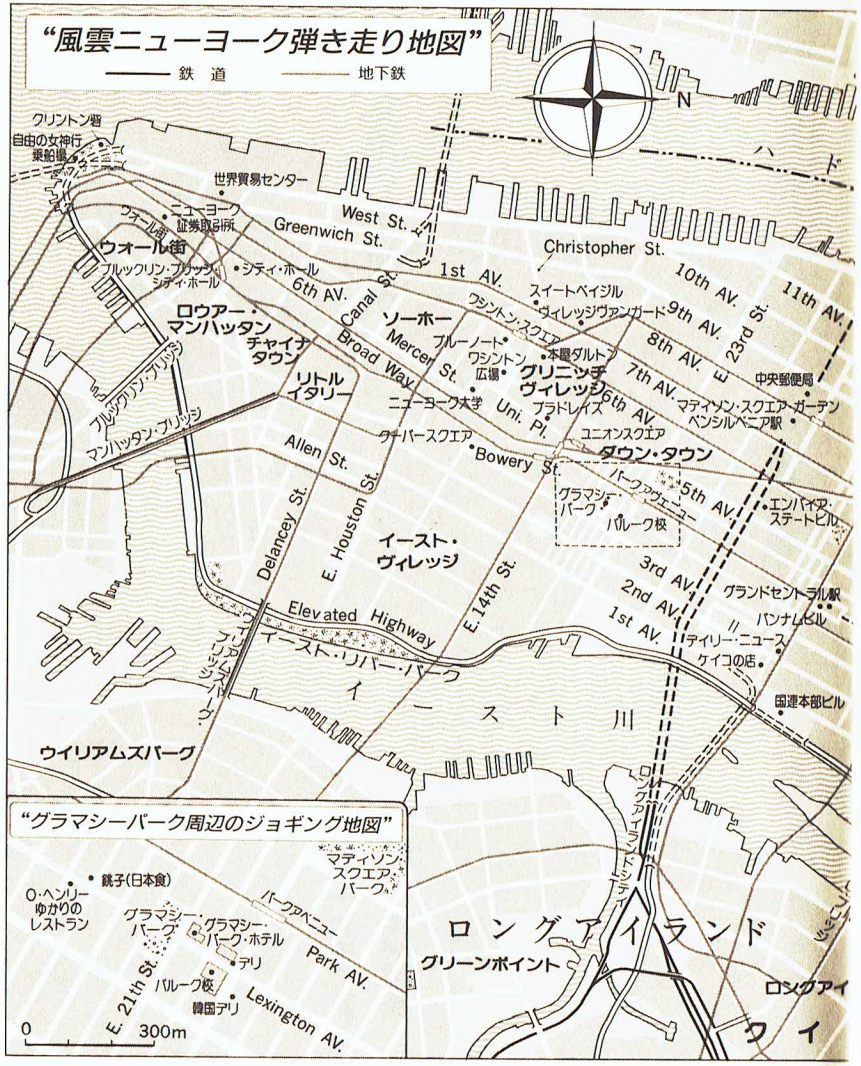
山下洋輔

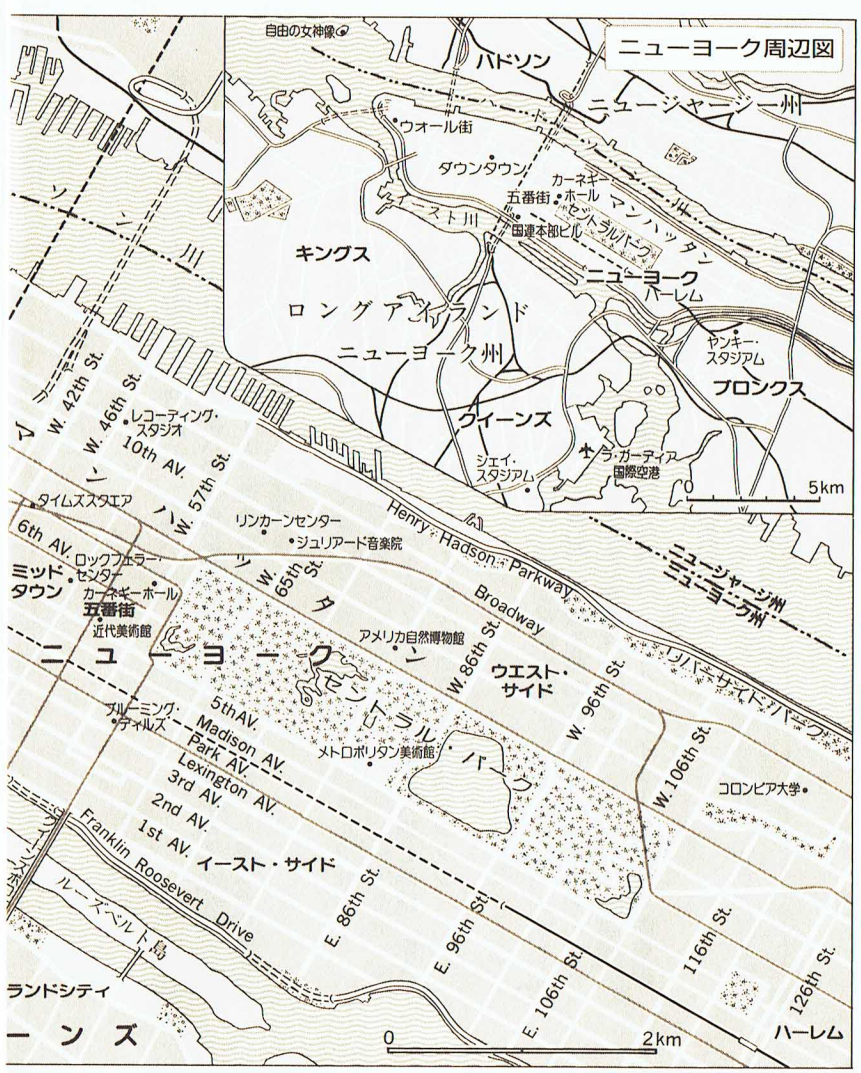


ISBN4-16-346340-2 C0095 P1300E
文藝春秋刊　定価1300円(本体1262円)



杉並区立永福図書館
☎ 322−7141


“風雲ニューヨーク弾き走り地図”
鉄道
地下鉄
N
クリントン砦
自由の女神行乗船場
世界貿易センター
ニューヨーク証券取引所
ウォール街
ブルックリン・ブリッジ
シティ・ホール
West St.
Greenwich St.
Christopher St.
1st AV.
6th AV.
Canal St.
ロウアー・マンハッタン
チャイナタウン
ソーホー
リトルイタリー
Broad Way
Mercer St.
ブルーノート
ワシントン広場
グリニッチヴィレッジ
スイートベイジル
ヴィレッジヴァンガード
9th AV.
8th AV.
7th AV.
6th AV.
10th AV.
11th AV.
23rd St.
中央郵便局
マディソン・スクエア・ガーデン
ペンシルベニア駅
ニューヨーク大学
Uni. Pl.
ブラドレイズ
ユニオンスクエア
ダウン・タウン
グラマシー・パーク
パークアヴェニュー
パルーク校
5th AV.
エンパイア・ステートビル
Allen St.
Bowery St.
Delancey St.
E. Houston St.
イースト・ヴィレッジ
E. 14th St.
3rd AV.
2nd AV.
1st AV.
グランドセントラル駅
パンナムビル
タイリー・ニュース
ケイコの店
国連本部ビル
Elevated Highway
イースト・リバー・パーク
イースト川
ウイリアムズバーグ
ロングアイランド
グリーンポイント
ロングアイランドシティ
“グラマシーパーク周辺のジョギング地図”
マディソンスクエアパーク
銚子(日本食)
O.ヘンリーゆかりのレストラン
グラマシーパーク
グラマシーパーク・ホテル
パークアベニュー
Park AV.
デリ
パルーク校
韓国デリ
Lexington AV.
E. 21th St.
0
300m


ニューヨーク周辺図
自由の女神像
ハドソン
ニュージャージー州
ウォール街
ダウンタウン
カーネギーホール
五番街
セントラルパーク
マンハッタン
イースト川
国連本部ビル
キングス
ロングアイランド
ニューヨーク州
ニューヨーク
ハーレム
ヤンキースタジアム
ブロンクス
クイーンズ
シェイスタジアム
ラ・ガーディア国際空港
5km
W. 42th St.
W. 46th St.
レコーディングスタジオ
10th AV.
W. 57th St.
タイムズスクエア
リンカーンセンター
ジュリアード音楽院
6th AV.
ロックフェラーセンター
ミッドタウン
カーネギーホール
五番街
近代美術館
W. 65th St.
Henry Hadson Parkway
ニュージャージー州
ニューヨーク州
Broadway
アメリカ自然博物館
W. 86th St.
ウエスト・サイド
リバーサイドパーク
W. 96th St.
W. 106th St.
ブルーミングディルズ
5thAV.
Madison AV.
Park AV.
Lexington AV.
3rd AV.
2nd AV.
1st AV.
イースト・サイド
メトロポリタン美術館
セントラルパーク
コロンビア大学
Franklin Roosevert Drive
ルーズベルト島
E. 86th St.
E. 96th St.
E. 106th St.
116th St.
126th St.
ハーレム
0
2km

なつかしい人たち

これが翌年起きることだった。そのブラドレイズを出てタクシーを探す。フェロンはケイコたちが来るかもしれないので残っていてくれる。こちらが先にゲルニ（逃げること）をきめることになった。

ブラドレイズの右横は二十四時間営業の食料雑貨屋になっている。

以前にタザキ氏が真夜中すぎにここに入って一人の老黒人と遭遇した。

ロッペイ、G、タザキ氏の三人で買い物をしているときに一人のよれよれの小柄な黒人のじいさまが通路をうろついていた。覚束なげな手つきでサラダやソーセージを取り上げてはこぼしたりする。せまい通路で結構邪魔になっていた。

レジでそれぞれ勘定をすませて帰ろうとするとGの包みがなくなった。あとから来たじいさまがいつのまにか持っていってしまったのだ。Gはあわてて追いかけて取り戻した。そのときタザキ氏は入り口の脇に立っているじいさまの老白人妻に気がついた。若いころはさぞ美しかっただろうと思わせるその白人妻はトロンボーンのケースを持っていて、ネーム・プレイトを見ると「アル・グレイ」となっていた。かつてベイシー、エリントン両オーケストラで活躍し、今でもニューヨークのキラ星のごときミュージシャンの中でも別格の扱いを受けている、あのアル・グ

レイだろうか。

「ミスター・アル・グレイ？」

興奮で取り乱しつつも話しかけると、そうだという答えだった。タザキ氏はびっくりしつつ、あのレコードも持っているこのレコードも持っている、大ファンだと言った。アル・グレイはうれしそうにうなずき礼を言って去っていった。

「ああいうことがざらに起きるのもニューヨークならではですね」

このタザキ氏の感慨がこうしてこの本をおれに書かせた動機なのかもしれない。

ブラドレイズ界隈ではまた別の事件もあった。遭遇したのはまたもやGだった。Gの遭遇したあやしい事件というのはこうだ。

夜中にブラドレイズから出てくると人のよさそうな初老のおじさんに呼び止められた。おじさんは「今日ジャマイカから来たばかりで右も左も分からない。ブラウン・ストーン・ホテルに行きたいのだが知らないか」と言う。Gが知らないというと「あやしい者ではない、このとおり金はある」といってポケットから二つ折りの札束を出して見せた。高額紙幣だったかどうかは確認できない。

そこへタイミングよく黒人の若者が通りかかった。「こんなところで金を見せてはいけない。危ないぞ」などと言ってよってきた。おじさんがまた事情を話すとそれでは電話番号案内でそのホテルの番号を聞こうということになった。自然に巻き込まれていたGともども三人で角の公衆

電話まで行って聞いたが、そういうホテルの名前はなく番号は分からないと言われた。どうしようかと思う一瞬、若い男が「ところで荷物はどうしたのだ」とおじさんに聞いた。するとおじさんは「空港で誰かにあずけた」というような変な答えをした。「それではそれを取りに行こう」と若い男が言い「そのあいだ、お前の部屋にこれをあずかってくれ」とGに自分の持っていたバッグを見せた。

なぜか話が急に「お前の部屋に行こう」ということになった。おじさんはしきりに「あやしい者ではない」とくりかえして札束を見せようとする。そのたびに若い男が「こんなところで金を見せるな」と止める。そうしながら皆でGの部屋に行くという展開になってきた。「お前の部屋はどこだ」などと聞くが、このへんでGもこれはアヤシイと結論をくだした。どんどん二人をおいて帰ってきた。後ろもふり向かなかったのでその後二人がどうしていたのかは分からない、という事件なのだ。

これは絶対に「スティング」の匂いがする。部屋に入ったとたんにホールドアップの可能性は強い。これのすべてがワナだとするとブラウン・ストーン・ホテルという名前もシブい。実在してはならないがそのあたりにありそうな名前としてはぴったりだ。それにしてもいやに込み入ったスジ書きだ。ジャマイカだの空港だの大金だの荷物だの、いろいろ出して相手の同情を引き、同時に注意力の拡散を狙ったものだろうが「お前の部屋に行く」という理由がいまいちだったのが失敗のもとだった。

などと分析しているがこれが全部本当のことでおじさんは本当にジャマイカから今日ついた人のよいお金持ちだったということもまったく可能性がないわけではない。ニューヨークでは何でも起こりうる。

そのような可能性をはらみつつニューヨークは一晩中呼吸しているのだ。

タクシーをつかまえてホテルに戻った。人影の少ないロビーを通りエレベーターに乗った。部屋に入りテレビをつけ冷蔵庫からビールを取り出して飲んだ。ほとんどパックしてある荷物を点検し、目覚まし時計をセットする。ベッドにもぐりこみ、レコーディングのテープをヘッドホンで聴いた。やがてそのまま眠り込んだ。夢の中の月の砂漠で兎がダンスを踊っていた。

翌日、早く起きて公園の周りを走った。

二日酔の汗をしぼり出した。すぐに疲れて頭が朦朧となった。例によって日焼けした長い手足をした金持ち女や非常なデブ男やマラドーナのような男やあっと驚く美少女がてんでに走っている。

にこにこしながら逆回りに走ってくる日本人がいたので見ると色川武大さんだった。ギャングのようなチェックの上着だった。ニューヨークが好きだったからなあ。時々こうして走っているのだろう。

それならばと思うと案の定、植草甚一さんも走っていた。こちらはフロックコートに鼻眼鏡だった。

殿山泰司さんもいた。例のぶっちょう面のまま、しかしどこかうれしげにゆっくり走っていた。

気がつくと隣りに武田和命がいた。苦笑しながらいやそうにだらだら走っていた。「なんでこんなことしなきゃならねえんだ」と無言で言っていた。

前回の乱入旅の立役者だったアキ生田も走っていた。スタイリストらしく意外にきれいなフォームだった。はりつめた表情と切れ上がった両目じりはあのままだった。

ピアノの八木正夫さんと八城一夫さんが一緒に走っていた。ギターの高柳昌行さんとトランペットの福原彰さんも走っていた。

遠くの方にモンクやベイシーやエリントンやバードやブレイキーやデクスターやゲッツらしき姿も見えた。ハンプトン・ホースもいた。初期のレコードどおりの白服にチョッキの姿で軽々と走っていた。マイルスもいたが、まだここには加わりたくないらしくあいかわらず不機嫌な顔で柵にもたれていた。

皆で走った。公園の周りをぐるぐる回った。

「もう十年、もう十年」と誰かが言っていた。よく聞くとおれの声だった。「もう十年早かったらなあ」とおれの声が言っていた。「黙れ」とおれは答えた。「黙って走れ」

おれたちはぐるぐる回った。

汗だくになってホテルの前に帰ってくるとバンが止っていて中からドラムの吉田君が出てきた。空港まで送ってくれる気らしい。感謝をした。部屋に入りシャワーを浴び荷物を持って降りてきた。Gは昨日から打ち合わせでトロントに行っている。帰りは一人旅だ。吉田君はこの車を使う仕事を何かしているらしいが公私混同で来てくれたらしい。疲れて眠り込んだまま空港についた。チェックインをして出発の時間まで吉田君とカフェに座った。ビールを飲むとまた頭が朦朧となった。ストリートミュージシャンのお礼やもろもろの話をしているうちに時間がきた。立ち上がって飛行機へと進んだ。吉田君はにこにこして見送ってくれた。

飛行機が飛び上がった。下を見ると太古の海と原始の森に囲まれた人工の都市が陽光をあびてきらめいていた。そのニューヨークがたちまち遠ざかっていった。